

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE WINTER EDITION

北星学園大学

北星学園大学短期大学部



02

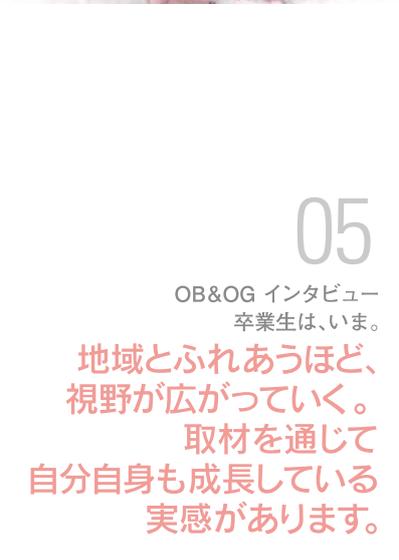
特集
旭川市旭山動物園
副園長 坂東元さんインタビュー

動物たちの
「ほんとうの姿」が
教えてくれること。



04

プロジェクト北星
地域活性化計画
ービジネスモデルコンテストー
学生の視点から、
ユニークな
シニアビジネスを
提案!



05

OB&OG インタビュー
卒業生は、いま。

地域とふれあうほど、
視野が広がっていく。
取材を通じて
自分自身も成長している
実感があります。



06

サークル活動
汗と、涙と、友情と。

チアダンス部

キラキラの笑顔で元気を運ぶ
“Starry Girls”!



07

先生たちのその素顔
文学部 吉田 一彦先生

戦争を見つめる。
文化が、人間が、
平和が見えてくる。



08

HOKUSEI INFORMATION
北星学園大学からのお知らせ。

学校法人北星学園は、
創立120年を
迎えました。



特集 INTERVIEW

旭川市旭山動物園 副園長 坂東元さんインタビュー

動物たちの「ほんとうの姿」が 教えてくれること。

ペンギンが水中を自在に泳ぎ、頭上でヒョウがのんびりと眠る—動物たちのいきいきとした暮らしぶりが全国の注目を集める旭山動物園。その躍進を支えた副園長・坂東元さんに、日本のテーマパーク事業を研究する2人の学生がインタビュー。「かわいい」だけではない動物の魅力を自ら体験し、旭山動物園のねらいと今後のビジョンに迫りました。

干渉しないことが、動物と付き合うルールです。

鈴木: さっき「ペンギンの散歩」を見ました! とてもかわいかったけれど、ときには「今日は散歩したくない」というペンギンもいるそうですね。どうやってペンギンの気持ちを理解するのですか?

坂東: 犬の散歩と同じで、習性を利用するんです。散歩に行きたいペンギンは入り口で待っているんですよ。当園は人と野生動物の付き合い方を体感してもらうための「行動展示」を基本にしており、ペンギンの散歩もあくまでペンギンのために行っているもの。入園者数が少なかったころは観客といっしょに動物の話をしながら歩いていましたが、ここ2~3年で予想以上の評価をいただき、入園者数が増えるにつれて想定外の事態が起こるようになってしまいました。ペンギンに手を出して持ち上げようとする人まで現れるようになってしまっ…。多くの方に来ていただけるのはほんとうにうれしいのですが、「行動展示」という当園のスタンスをいかに守り抜くかという課題に直面しています。

鈴木: そうなると動物もストレスがたまってくるのでしょうか。

坂東: そもそも当園は「お客さんは動物にとってストレスではない」ことが大前提なので、その点は絶対に譲らないつもりです。ペンギンがかわいらしくよちよち歩くのはなぜだと思いますか? 彼らは天敵がない陸上で進化したから、陸上の生き物に警戒心を持たないんです。なのに観客が手を出したり身を乗り出したりすれば、ペンギンも学習して歩くことに危機感を覚える。それがストレスになるんです。野生動物との付き合い方の基本は「干渉しないこと」。その点でみなさんを信頼した結果が当園のスタイルになっているのですが、マナーを守っていただけない人がいるのはとても残念ですね。



人間と動物、双方に心地よい動物園とは?

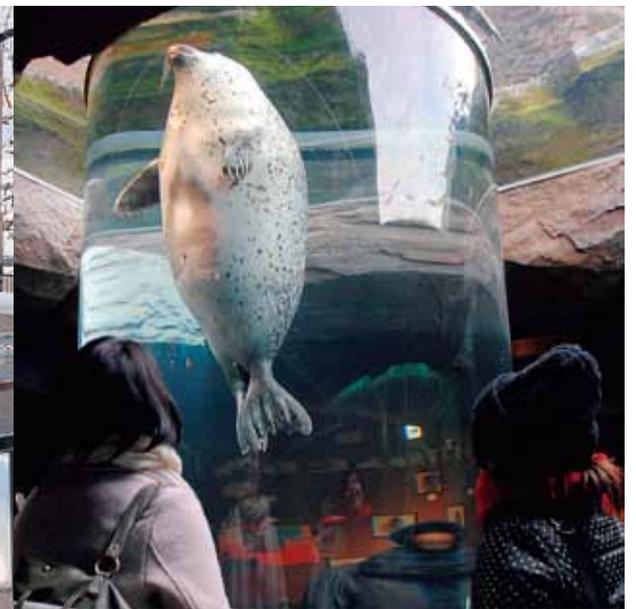
藤田: ホッキョクグマはかわいいと思っていたのに、アザラシを食べちゃうんですね。自然界の厳しさにショックを受けました。

坂東: じつは飼育係にとって最も恐ろしいのがホッキョクグマ。気配が読めないんです。ペンギンも一見かわいけれど肉食なので獠猛な面を持っています。ぼくたちがいちばん伝えたいのはそこなんです。ほんとうの姿を見ることで愛情や親しみが深まっていくのは人間同士でも同じでしょう。「ペンギンを近くで見ると目つきが怖い」なんて声を聞くと、ぼくたちが伝えたいことを感じてくれたかな、とうれしくなります。ぼく自身獣医なので動物のことはわかっているつもりだったけれど、動物園に勤務し始めて、じつは何も知らない自分に愕然としました。動物は何も言わないし、自分のかわいさを自慢したりしません。だからこそ彼らをよく知り、気持ちを代弁してあげなきゃいけないと思っています。

鈴木: 手書きの展示物やアザラシのもぐもぐタイム(給餌)のガイドでも、担当の方の動物を思う心が伝わってきました。

坂東: 展示物に廃材を利用して手作りしたり、ふだんの飼育で気づくことを解説に加えたり、担当者が自分の言葉で伝えることを心がけています。洗練はされていないけれど「動物たちのほんとうの姿を伝えたい」という思いは受けとめていただいているのでは、と思っています。中にはディズニーランドのイメージで来園して「期待どおりの動きが見られない」と憤慨される人もいますが、調教しているわけではないので…。時にはヒョウが動かないといって雪玉をぶつける人もいて、怒りを覚えることもあります。





PROFILE

ばんどう げん
坂東元

1961年旭川市生まれ。獣医師・旭山動物園副園長。酪農学園大学大学院獣医学研究科修士課程修了後、1986年より旭山動物園に勤務。現在は動物園全体の運営や施設の企画のほか、飼育展示係長としての役割も担っている。



経済学部経営情報学科3年
すずき いみ
鈴木 育美
動物との付き合い方はもちろん、テーマパーク研究の観点からも興味深いお話がたくさん聞けました。



経済学部経営情報学科3年
ふじみやま こ
藤田 雅子
初めての旭山動物園に大興奮!「動物園は見ているだけでつまらない」という思い込みを覆されました。



鈴木: 私たちはゼミでディズニーリゾートを中心としたテーマパーク業界を研究しているのですが、たしかにまったく違います。

坂東: 人間のための楽しさや心地よい空間を追求するテーマパークと動物園はまさに対極。動物園ではハエもニオイも当たり前ですが、人間のために殺虫剤を撒いたら鳥が死んでしまう。人間と動物それぞれの心地よさを両立するのは難しいけれど、面白いことにディズニーランドの関係者がしばしば視察研修に来園されるんですよ。これまで日本では、海外のテーマパークのノウハウなしに成功した例は皆無だったんです。それを公務員が実現したことにごく驚いていました。ぼくたちはそんなことはまるで考えていなかったのですが、いわゆる発想の転換なのでしょうね。ただ、ぼくたちから見るとディズニーランドのホスピタリティには感服します。行列の整理など、クレームの出ない秩序を作るところはさすがプロ。当園では入園者が急増してあわてて対応した分、不備も多かったので、勉強させてもらってスムーズに対応できるようになりました。

今だけでなく、長い目で見ることの大切さ。

藤田: 旭山動物園の今後の展望は?

坂東: 廃園の危機に追い込まれていたときから、生命が「飽きた」と切り捨てられることがあってはならない、芸ではなく生きる姿を見せることで「つまらない」と言わせない動物園を作ろうと思ってここまでやってきました。その思いは実現しつつあるけれど、媚を売ったらただのブームで終わってしまう。自分たちが求める動物園のあり方を維持しつつ、動物・来園者・スタッフ、それぞれがストレスなく、ともに歩いていくために、まだまだ課題は多いですね。また、今は観光客が多すぎて地元の市民が来にくくなっているのがつらいところ。ピークを過ぎてからがほんとうの勝負だと思えます。家は新築より10年後のほうがしっくりなじんで住みやすくなります。当園も、10年後も動物たちが快適に暮らせるよう工夫して作りました。そういう長い目で当園を評価してくれる人が増えれば本物ですね。うれしいことに最近では本州からのリピーターも増えていて、東京から日帰りで来てくれる方も少なくありません。ぼくたちが試行錯誤しながら蒔いてきた種が、少しずつ芽を出してきている気がします。

藤田: 坂東さんの学生時代についてもお聞かせください。

坂東: とにかく獣医になりたくて大学に進学しましたが、あまりにもひとつの道にこだわりすぎて自分をせばめるのはイヤだなと思っていました。よく「常識にとらわれない人」といわれるのですが、みんなが同じ方向へ進んでいくとき、いったん反対の方向を見てみたい、自分が納得できる方へ進みたい、と考えるところがあります。みんなが「いい」と言うから「いい」と思い込んでいて、けっこうあるんじゃないかな? もしもそこで違和感があったら、その感覚を大切にしてほしい。当園も、狭いオリの中で動物が暮らしていることに違和感を覚え、彼らがもっといきいきするためにはどうしたらいいか、と考えたら、その結果が今までの常識をはるかに超えていたということ。そこまでは誰でも考えることはできるけれど、失敗したらどうしよう、と考えるからみんなやらないんですね。そこで立ち止まっていたら、今の旭山動物園はありませんでした。

鈴木: 動物から学んだことはありますか?

坂東: 人間の愚かさ、ちっぽけさですよ。人間は自分をごまかしたり、誰かと比較して自分を守ろうとするズルさを持っているけれど、動物はオリの中でも文句をいわず、そこを自分の世界として生きる場所がすごいと思う。なんて潔いんだろう、と感動します。文明が進んで生活が便利になる反面、地球環境も動物たちも今、大きな危機に立たされています。人間たちが、その場しのぎでつじつまを合わせてきたことに、そろそろひずみが出てきています。そのひずみを正して、未来を変えていくのはきみたち若い人々です。20年後、30年後を見つめる目を大切にしてほしいと願っています。



BUSINESS MODEL CONTEST

プロジェクト北星—地域活性化計画
[Hokusei Project-Local Revitalization Plan]
第3回
ビジネスモデルコンテスト
2006.9.30

学生の視点から、ユニークな シニアビジネスを提案!

北星学園大学経済学部経営情報学科では、学生の企画力や分析力、プレゼンテーション能力などを養うことを目的とした「ビジネスモデルコンテスト」を開催しています。これは社会の現状に即したテーマに基づき、有志の学生がビジネスモデルを考案するもの。本年度は「アクティブシニア向けビジネスプラン」をテーマに、書類審査を通過した7チームがプレゼンテーションに参加。社会の第一線で活躍するビジネスマンの方々に、若者らしいフレッシュなビジネスアイデアを披露しました。プロの目による厳正な審査の結果、2チーム(うち1つは個人参加)が優秀賞をダブル受賞。「事業化に興味がある」とのうれしいお言葉もいただき、学生にとっては大きな自信と意欲につながったようです。将来、北星発のビジネスがみなさんのシニアライフを豊かに変える? かもしれません。



▲審査員のみなさま

全体講評から

審査員長
さわい けんいち
澤合 賢一さん
(札幌ゴールド倶楽部代表)



アクティブシニアのライフスタイルは多岐にわたります。その点でみなさん苦勞されたと思いますが、「START! RENTAL LIFE!!」はポイントをついた提案でしたね。商店街の活性化モデルとして、事業化に結びつけたいと思わせる内容でした。「R-50指定ヌーンカフェ & ナイトレストラン計画」は、実現性の面では難しいものの、とにかくプレゼンテーションが楽しかった。下宿のおばあちゃんの見意を取り入れた点も高評価を集めました。

ビジネスモデルコンテストのプレゼンテーション資料などの詳細につきましては、
本学ホームページの経営情報学科サイト内「ビジネス通信」をご参照ください。
北星学園大学ホームページURL : <http://www.hokusei.ac.jp/>
経営情報学科ホームページURL : <http://www.hokusei.ac.jp/dmi/>

優秀賞

「START! RENTAL LIFE!!」



経済学部経済学科
3年生 福原 陸己



経済学部経営情報学科
3年生 佐藤 麻美



経済学部経営情報学科
3年生 鈴木 葉子

カルチャー講座と関連グッズのレンタルサービスを組み合わせた、シニアのためのコミュニティ事業を提案。「パソコンが使えない祖父がヒントをくれました」(鈴木さん)、「意見の対立や資金計画の難しさに悩みつつも、当日はリラックスしてプレゼンテーションに臨めました」(佐藤さん)、「学生の立場で社会貢献を考えたことが、学生生活を見直すきっかけにもなりました」(福原さん)と、それぞれに価値ある経験となったようです。

優秀賞

「50歳未満入店お断り!」 R-50指定ヌーンカフェ & ナイトレストラン計画



文筆活動に興味があり、多くのコンテストの参加・受賞経験がある西山さんが提案したのは、シニア限定カフェ & レストラン。「ヌーンカフェ」「和ランチ」など、ネーミングにもこだわり満載です。「企画のブラッシュアップが課題」と反省する一方、お得意のプレゼンテーションでは審査会場が笑いに包まれ、大好評を博しました。「今後は学内だけでなく全道・全国レベルの提案もしてみたいですね」と意欲を語ってくれました。



経済学部経済法学科
3年生 西山 雄貴

OB & OG Interview

卒業生は、いま。

長谷川さんが取材して掲載された記事



地域とふれあうほど、視野が広がっていく。
取材を通じて自分自身も成長している実感があります。



北海道新聞社 苫小牧支社 報道部
はせがわ ゆい
長谷川 唯さん
2000年3月 北星学園大学文学部英文学科卒業

驚き、発見、感動… 体当たりの新人記者時代。

北海道新聞社苫小牧支社報道部の記者として活躍する長谷川唯さん。厚真町とむかわ町のニュースや農業、畜産業、漁業などに関する話題を中心に、取材や撮影、原稿執筆などを手がけています。

最初の赴任先は中標津支局。

—「担当だった羅臼町と標津町はいずれも秋サケの水揚げ量日本一を競う町で、漁師さんの取材で漁港へ行くと大量のサケが陸揚げされていて、初めて見る光景に感動したものです。中標津町では牛舎の作業を初体験。牛って案外デリケートで、世話にはけっこう気を遣うんですね。札幌で生まれ育った私はそれまで“北海道＝札幌”という感覚で、北海道のことを何も知らなかったんだなあ、と実感しました。羅臼沖で海上保安署の巡視船に乗り、船酔いに苦しみつつ撮った写真が第一面に掲載されたこともいい思い出です」。

都市生活では味わえない大自然に感動し、地域の人々とふれあいながら、北海道の魅力を感じて発信する—体当たりの取材を通してたくさんの驚きと感動に出会った新人記者時代は、長谷川さんを大きく成長させるきっかけとなったことがありません。

〈大学・写真部時代のお気に入りの一枚〉

アメリカのペンシルバニアに留学中、旅行したジャマイカでロシア人の友人を撮影した写真。



人に会い、世界が広がる。 学生時代も、これからも。

新聞記者をめざしはじめたのは大学時代。高校生のときに、放送局と写真部の活動を通じて「取材したことを人に伝える」おもしろさを知り、書く仕事をしたと思うようになったとか。

—「大学でも写真部だったので、いまの仕事で写真を撮るときにその経験が活かされているかもしれません。在学中はアメリカ留学がいちばんの思い出。10ヵ月ほどの短い期間でしたが、英語を話せるようになったことはもちろん、海外で暮らしたことで『日本以外の国でも生きていけるなあ』という漠然とした自信ができました。ただ、もっともっと勉強しておけばよかったと少し後悔していますが…(笑)」。

好きな英語やサークル活動、アルバイト、かけがえない友人との思い出。「好きなこと、やりたいことを思いきりやった4年間。ほんとうにあっという間でした」と語る長谷川さん。社会人になったいまも、彼女の世界は広がりつづけているようです。

—「新聞記者は人に会って話を聞くのが基本。これまでいろいろな職業や立場の方にお会いしてきましたが、毎回新鮮な驚きや発見があります。今まで知らなかった世界を垣間見て、自分の視野が広がっていく。それがこの仕事の一番の魅力かもしれません」。

「さまざまな情報が氾濫する時代。その中からほんとうに読者に必要なものを見極め、正しく伝えていくことで、『毎日読みたい道新』をめざしたい」と語る長谷川さん。マスコミ人としての責任感に顔を引き締め、新しい出会いに胸をふくらませつつ、今日もカメラ片手に取材に奔走しています。



さまざまな人生に出会い、新たな発見をする。これぞ取材の醍醐味。

一瞬のシャッターチャンスを見逃さない。プロの腕の見せ所です。



CIRCLES

汗と、涙と、友情と。 [チアダンス部]

キラキラの笑顔で元気を運ぶ “Starry Girls”!

ヒップホップやファンクの軽快なリズムに乗って流れるようにステップを踏み、軽やかにジャンプ!「チアダンス」はチアリーディングとはひと味ちがう、ダンスがメインの表現競技。まだ競技人口の少ない北海道から、全国への一歩を踏み出した「^{スターリース}STARRYS」の青春。



第6回全日本チアダンス選手権大会にて 2006.11.25

振り付けもトレーニングもすべて自分たちで。

「私たちも最初はチアダンスという競技を知らなかったんです」と笑うチアダンス部部長の佐藤さん。もともとチアリーディングをやりたくていろいろ調べているうちにチアダンスを知り、仲間を募って活動を始めたそうです。現在の部員は15名。最初は指導者が見つからず、日本チアダンス協会に依頼したりしていましたが、現在は自分たちで試行錯誤しながら、振り付けやトレーニング方法を工夫して日々練習に励んでいます。

わずか2分半にすべてのパワーを注ぎ込む。

チアダンスは、2分半の中に規定の音楽やダンス技術を組み込み、チームワークやチアスピリット(人を元気づける精神)を表現する競技。わずか2分半にすべてのパワーと技術を結集させるために、部員は何か月もの間ハードな練習に打ち込みます。取材に訪れた日はトレーニングの真っ最中。じっくりと時間をかけてストレッチを行い、各自が鏡で自分の動きをチェックしながら、ジャンプやステップの練習を繰り返します。チアダンスの華やかなイメージとは異なるストイックな雰囲気は、思わず圧倒されるほど。とはいえ休憩時間になるとにぎやかな笑い声ははじけ、年頃の女の子らしい明るいムードに包まれるのです。



ケガを防ぐためにストレッチは入念に行います。



軽やかに、ダイナミックに。練習も真剣勝負。

チアダンスの魅力を、 厚別区のみなさんへ。

チアダンス部の活動は学内だけではなくありません。一昨年冬の「新さっぽろ冬まつり」と昨年夏の「厚別区民まつり」に出演したほか、厚別区企画提案制度まちづくり事業の一環として「チアダンス健康ふれあいコミュニケーション」を開催。厚別区民の女性(3歳～上限なし!)を対象に、チアダンスを通じた健康づくりを目的とした厚別区オリジナルダンスの考案に取り組んでいます。さらに昨年11月には東京で開催された「全日本学生チアダンス選手権大会」に出場。残念ながら予選敗退しましたが、強豪チームがひしめく中、フレッシュな演技を披露しました。チーム名「STARRYS」は「星のように輝く」という意味。彼女たちの笑顔がキラキラ輝いているのは、北星の誇りとチアダンスへの情熱があるからにちがいません。



ポンポンを使ったかわいいダンスも見せ場のひとつ。



はつらつとしたダンスに観客から大きな拍手が。



演技のアイデアを出し合うのも楽しい!



部長の
佐藤 文華さん
文学部
心理・応用コミュニケーション学科3年



会計担当の
松田 佳織さん
経済学部経済学科3年

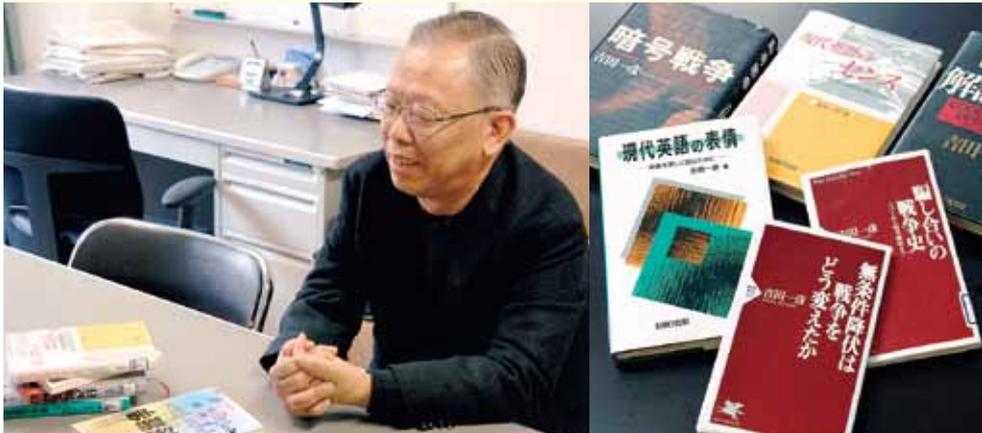
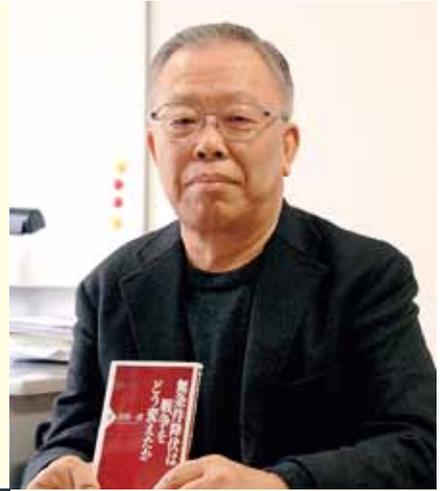
※役職名は、取材時(2006年11月)現在

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●文学部 吉田一彦先生●

戦争を見つめる。
文化が、人間が、平和が見えてくる。



PROFILE

よしだ かずひこ
吉田一彦

1936年神戸市生まれ。
神戸市外国語大学卒業、
大阪大学大学院博士課程単位取得退学。
神戸大学国際文化学部教授を経て、
同大学名誉教授。
1999年4月から北星学園大学文学部教授。
専攻は情報戦争に関する事項を
主とする情報論。

暗号と現代人の深い関係。

「暗号」と聞くと特殊な世界を想像するかもしれませんが、じつはみなさんの身近にも存在しています。たとえばあるデパートでは、決まった曲が流れると「売上目標を達成しました」という社員に向けた暗号になっています。デパートで曲が変わったら注目してみてください(笑)。また、インターネットの世界でも暗号は不可欠。インターネット通信は中継点でだれかに情報を傍受される危険があるため、暗号を使ってセキュリティを守るのです。パソコンのユーザー認証から企業の商取引まで、IT社会における暗号の役割はますます重要になってきています。最近、新聞などで「量子コンピュータ」という言葉を目にしたことがあるかもしれませんが、これは従来のコンピュータでは20億年かかる素因数分解をわずか数秒で解いてしまうといわれています。もしもこれが実現されれば、現在のネットワークセキュリティは崩壊してしまいます。暗号研究に課せられる課題と責任は、今後ますます重大になっていくでしょう。

戦争は“情報をめぐるだましあい”

暗号が戦争と密接に関わっていることはご存じの方も多いでしょう。古くギリシャ時代には剃りあげた頭皮に情報文を入れ墨で書き込み、髪が伸びるのを待って国へ戻るという方法がありましたし、記憶に新しい湾岸戦争・イラク戦争は「情報戦争」と明確に位置づけられています。戦争はいわば“情報をめぐるだましあい”といえます。そもそも私が暗号に興味を持ったのも、太平洋戦争がきっかけなのです。当時小学校3年生だった私の目にも、日本が情報戦で負けたのは明らかでした。そこでアメリカで戦争論を研究したいと考え、英語の勉強を始めたらそちらがおもしろくなってしまった(笑)。ですから戦争論だけでなく、英語語法の研究にもずいぶん力を注ぎました。また、戦争を研究していくと、その国の文化がよく見えてきます。たとえば大戦中に日本軍がガダルカナルで敗北しましたが、そのほとんどが餓死でした。日本軍は食糧として米俵を配給していたのですが、米俵は重くて戦地まで運ぶことが困難なうえに、炊飯に火を使うため敵に発見されてしまう…。今なら考えられない発想ですが、当時の日本人がいかに米(コメ)文化に固執していたかがえますね。戦争を知ることとは異文化コミュニケーションを知ることでもあるのです。

過ちを繰り返さないために、過去の敗戦に学ぶ。

よく戦争と平和が対義語のように扱われますが、歴史を振り返ってみると、戦争と戦争の間に平和があると行ったほうがいい。これまでの戦争は“情報をめぐるだましあい”が悲惨な殺戮に結びついていきましたが、この先同じ過ちを繰り返さないためには、過去の敗戦を掘り下げて検証する必要があります。ITの進化によって暗号技術も今後ますますハイテク化していくでしょうが、各国の文化や人間の心理が深く関わるアナログな側面はそんなに大きく変わるものじゃない。そんなところがおもしろくて、私は暗号と戦争を追求し続けるのかもしれない。

〈吉田先生の主な著書〉

- 『ドゥーリトル日本初空襲』
(三省堂、1989)[後に徳間文庫に収録]
- 『シエンノートとフライングタイガース』
(徳間書店、1991)
[後に『アメリカ義勇航空隊出撃』で、
徳間文庫に収録]
- 『情報で世界を操った男』(新潮社、1997)
[後に『CIAを創った男
ウィリアム・ドノバン』でPHP文庫に収録]
- 『暗号戦争』(小学館、1998)
[後に日経ビジネス人文庫に収録]
- 『暗号解読戦争』
(ビジネス社、2001)
- 『騙し合いの戦争史』
(PHP研究所、2003)
- 『無条件降伏は戦争をどう変えたか』
(PHP研究所、2005)



『暗号事典』(研究社)
(吉田一彦・友清理士共著)
昨年末に刊行された、吉田先生の最新著書。暗号のしくみや歴史、ユニークなエピソードなどの解説1,300項目と豊富な図版で構成する、暗号の百科事典



北星学園創立120周年

Shine Like Stars

一世にあって星のように輝き—

北星の輝き、 時を超える。

学校法人北星学園は、創立120年を迎えました。

本学は1887年の開学以来、

創立者である米国人女性宣教師サラ・クララ・スミスの

愛と知と技に基づく志を受け継ぎ、

キリスト教の信仰と伝統を土台とした教育を実践してきました。

1951年には女子短期大学、

1962年には社会の要請に応じて男女共学の4年制大学を開設。

時代の変化にシなやかに対応しながら、

時流に流されない信念と人格をはぐくむ人間教育に、

これからも尽力してまいります。



北星学園創立者 サラ・クララ・スミス

SINCE 1887

[北星学園のあゆみ]

- 1887年 サラ・クララ・スミス女史によりスミス塾が札幌市北1西6に開塾
- 1889年 スミス女学校として正式認可
- 1894年 札幌市北4西1に移転。北星女学校と校名変更
- 1925年 聖書・英文・家政専攻科設置
- 1929年 札幌市南5西17に新校舎建築移転(後に、南4西17に住居表示変更)
- 1935年 保育専攻科を設置
- 1943年 財団法人北星高等女学校と改称
- 1946年 財団法人北星学園と改称
- 1947年 新制中学校設置
- 1948年 高等学部設置
- 1949年 北星学園中学校、同高等学校と改称
- 1951年 学校法人北星学園に組織変更
北星学園女子短期大学開設(英文科)
- 1954年 女子短期大学家政科増設
- 1955年 短大附設幼稚園教諭養成所設置
- 1962年 北星学園大学開設(文学部英文学科・社会福祉学科)
北星学園女子高等学校、同女子中学校と改称
北星学園男子高等学校開設
- 1964年 大学が札幌市白石区大谷地に移転
- 1965年 大学経済学部(経済学科)増設
北星学園余市高等学校開設
- 1967年 女子短期大学附設保育専門学校と改称
- 1969年 女子高等学校に音楽科増設
- 1970年 女子高等学校に英語科増設
- 1978年 幼稚園教諭・保育養成所と改称
- 1980年 大学に専攻科(文学専攻科、経済学専攻科)設置
男子高等学校が下野幌に校舎を新築し移転
- 1987年 大学経済学部経営情報学科増設
男子高等学校を新札幌高等学校と改称し、共学制実施
学園創立百周年記念式典・祝賀会開催
- 1988年 幼稚園教諭・保育養成所廃止
- 1989年 短大家政学科を生活教養学科に名称変更
- 1992年 大学に大学院設置(文学研究科)
- 1996年 大学に社会福祉学部増設
(福祉計画学科、福祉臨床学科、福祉心理学科)
- 2000年 大学に大学院設置(社会福祉学研究院)
- 2001年 大学に大学院設置(経済学研究科)
- 2002年 大学の文学部に心理・応用コミュニケーション学科を
経済学部経済法学科を増設
北星学園女子短期大学を
北星学園大学短期大学部に名称変更
短大生活教養学科を生活創造学科に名称変更
北星学園新札幌高等学校を
北星学園大学附属高等学校に名称変更

学校法人 北星学園

[設置校]

- 北星学園大学大学院
- 北星学園大学
- 北星学園大学短期大学部
- 北星学園女子中学高等学校
- 北星学園大学附属高等学校
- 北星学園余市高等学校

